

## 第 10 回資源管理 WG 議事録

日時：2017 年 11 月 13 日（月）9:30～11:30

場所：虎ノ門ヒルズ 9 階 LONDON 会議室

出席者：崎田座長、杉山委員、森口委員、白井委員、古澤委員  
勝野オブザーバー、高林オブザーバー代理

※本議事録では、ワーキンググループを「WG」と記しています。

事務局：おはようございます。時間となりましたので始めたいと思います。本日は皆様ご多用の中お集まりいただきましてありがとうございます。定刻になりましたので、第 10 回資源管理 WG を開催いたします。

本WGはメディアの皆様にも公開とさせていただいております。カメラ・スチールの皆様は冒頭撮影のみとさせていただいておりますが、ペン記者の皆様は会議傍聴可能とさせていただいておりますのでよろしくお願いたします。本日は崎田座長はじめ総勢 5 名の委員およびオブザーバーにご出席いただいております。また、本日は環境省の鈴木オブザーバーに代わりまして、高林オブザーバー代理にご出席いただいております。よろしくお願いたします。

それでは、開会にあたりまして崎田座長より一言ご挨拶をお願いいたします。

崎田座長：おはようございます。WG の開催間隔が短くなっていますが、大事な時期ですのでよろしくお願いたします。

10 月の最後の時期に、ちょうどオリンピック・パラリンピックの 1000 日前の行事がありましたので、ご関係の皆様は色々とお忙しくされていたかと思います。前回も話しましたが、私は、ちょうど 10 月が 3R 推進月間だったということで、その時期に色々な所に 3R 関係で行ってきたのですが、10 月の中旬には沖縄で 3R 活動全国大会がありました。沖縄ですので、島などの限られた地域でどういう風に循環型地域づくりをするかといったお話をしましたが、そこでも、都市鉱山メダルを自治体が回収していますということで発表があり、このオリンピック・パラリンピックが持つ色々な影響力が全国に広がっているなと感じました。

10 月 30 日には、食品ロス削減に関する第 1 回全国大会が松本で開かれまして、環境省、農水省、内閣府、消費者庁の皆さんにもご協力をいただき、私は主催者側の方でやらせていただきましたが、食品ロス削減はやはり全国的な大きな盛り上がりになっています。そのような流れをうまく活かして、オリンピック・パラリンピックの資源管理にも質高く取り組んでいければと思います。どうぞよろしくお願いたします。

事務局：ありがとうございました。それでは、プレスの皆様、冒頭撮影はここまでとなりますので、よろしくお願いします。

それでは、以降の議事進行につきましては崎田座長をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

崎田座長：よろしくお願いいたします。それでは、まず議事次第を見ていただきたいのですが、前回の振り返りと論点の所をご説明いただいて、皆さんから質疑をいただきますが、2番目と3番目の議題についてかなりしっかり時間を取っていきたいと思います。4番目のISO20121の議題については、今回初めてきちんと情報提供をいただきますので、情報提供をいただいたうえでの細かい質疑が難しいようであれば、質疑は次回に繰り越すといったこともあるかと思えます。

今回の議論も、今日1日で結論を出すというよりは、皆さんの関心・意見をしっかり出していただいて、積み残しの所は次回にしっかり持って行って議論を深めるなどしていければと思います。このような進め方でよろしいでしょうか。それでは、議題1「前回WGの振り返りと今回の論点」についてご説明いただければと思います。

事務局：資料2を用いて、前回WGの振り返りと今回の論点について説明。

崎田座長：内容に関する議論はこの後の議題で深めますが、このまとめに関して、何かご質問やコメントある方がいらっしゃいましたらお願いいたします。

古澤委員：p5の表の一番上の所に、「リサイクルしやすい製品の調達」という項目に対応する目標が欲しいと記載されていますが、確か論点に出たのは、再生品とか再生材の調達に関する目標が必要ではないかという話だったかと思えますので、ご確認をお願いできればと思います。

崎田座長：再生品や再生材の使用ということで、後で事務局で調べておいていただけますか。どちらにしても大事な事ではあるのですが、議事録のまとめですので、よろしくお願いします。他にコメントはございますか。

それでは、今日の意見交換に入っていきたいと思います。議事2「資源管理分野の目標設定のあり方について」ということで、資料3が出ています。事務局からまずご説明いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

事務局：資料3p1~p3に基づき、資源管理の方向性について説明。

崎田座長：今までの WG では、全体を説明いただいて、全体に関する意見交換という形で行ってきましたが、そろそろじっくりと意見交換をしないといけないので、まずは 3 ページの方向性に関してご意見をいただければと思います。下のキーワードのところは、Zero Wasting Resource Use だけは英語になっていますが、上の文字はまだ英語の案はできていないということですね。これについて、ご意見があれば仰っていただければと思います。

杉山委員：p3 の 1 点目「資源効率の最大化」という所なのですが、ここはまさに森口先生がご専門なので、ご意見を伺った方がいいかと思いますが、資源効率というと分母と分子は何が来るんだろうと思ひまして。分母は資源全体で、分子の所に何が来るのでしょうか。コストなのか、そうではなくて大会の質みたいなものが分子に来るのかなと思ひたのですが、資源効率の最大化といいますと、どうしてもコストを最小に抑えようというイメージで捉えてしまったものですから、補足として、どういうイメージで資源効率をとらえておられるのかお聞きできればと思います。

崎田座長：ありがとうございます。森口委員お願いします。

森口委員：資源効率はまだ議論が完全に収束しているわけではないかもしれませんが、昨年日本が G7 の議長国として富山で行った環境大臣会合において、UNEP（国連環境計画）の国際資源パネルからレポートが出ておりまして、その中で資源効率あるいは資源効率性については、3 つの定義がありうると整理されています。

1 つ目は技術的な効率で、分母に何らかの資源の投入量を取って、分子は物理的なアウトプットですね。必ずしも資源の話とは言えないかもしれませんが、発電効率であれば、例えば、燃料をどれだけ入れて、どれだけ電力を生み出すことができたかという技術的な efficiency で、比較的工学的に定義がしやすいと思います。

2 番目は、分母はインプットした資源量を取るのですが、分子が今まさに杉山委員が仰った value、どういう価値を生み出したかということを取るという考え方があって、こういう場合には資源生産性という言葉が使われることが多いのですが、分母が物理的な量で、分子がある種の価値であります。お金で測ったり、企業などではどれだけの生産物あるいは売り上げを得たか、付加価値を生み出したかによって、国全体で見たら GDP 等で測られますし、オリンピックであれば集客数といった指標かもしれません。

3 番目は、資源効率性とは言いますけれども、資源の問題だけではなく、資源利用に関わる様々な環境問題、環境負荷とか資源利用に伴う負の環境影響を最小化することが効率の最大化なのだという取り上げ方をすることがあります。その場合には、分母の方に環境への影響を取ることもありうるかと思います。資源効率といっても、資源の投入量だけではなくて、資源の投入に伴うライフサイクルへの環境影響を分母に取る考え方もあります。この場合にもまた分子は何らかの価値やバリューを測るということで、3 番目が概念

的には一番美しいんですが、測るのが非常に大変であるということもあるかと思います。考え方として共通するのは、分母になるべく減らしたいもの、分子になるべく増やしたいものを取るということで、数字が高くなるように取ることが世界の共通的な考え方になっています。

崎田座長：そうすると、例えば今のお話だと、今回のオリンピック・パラリンピックでこういった言葉を使う場合に、全部入ってくるという理解でよろしいんですかね。ケースバイケースで考えるのでしょうか。

森口委員：そこはケースバイケースで、1番目の物理的な量どうして取れる所はそうすればよいと思いますし、全体としては2番目のような考え方が分かりやすいかもしれませんし、特定の資源などで、資源に伴う環境影響などを考慮しないといけないような時は3番目の考え方を取ることもありうるかもしれません。

崎田座長：この後、目標や指標の話になっていくかと思いますが、やはり、定量的な目標が出せるものと、出せないものがあることも、今までの話し合いで皆様も十分に共有していることだと思いますので、その場面場面で、今お話しいただいた3つの考え方で、どのような内容なのかを考えながら、皆様で納得する流れを作っていければと思いますが、杉山委員よろしいですか。

杉山委員：はい、わかりました。

崎田座長：森口委員、この3ページ目の方向性に関して全体で何かコメントやご意見はありますでしょうか。

森口委員：とりあえず2点申し上げたいと思います。まず、前回のWGをまとめた資料2については、特に確認が必要な項目はなかったのですが、資料2のp1にZero Wastingという目標の言葉よりわかりやすい言葉をとってお話があったということで、それを受けて今日の資料があるのかと思います。まず全体のキャッチフレーズであるZero Wasting Resource Useということで、これは、Zero Wastingという言葉が形容詞的にかかっていて、無駄にしないような資源の使い方といったような言葉になっているんですかね。印象としては、Zero Wastingという言葉は、いわゆるZero Wasteのゴミの話だけでなく、資源側の言葉も入れるようにという想いで入れたのですが、さらにResource Useという言葉をつけたことで、資源の方にやや重みが逆に行き過ぎているかな、という印象がないわけでもなくて、こう書いてしまうと、廃棄物側のことがかえって見にくくならないかと、直感としては感じました。

また、上の3点のバランスですけれども、協働と言いますか、全ての主体が参画していくことは、日本の循環型社会づくりにおいて既に言われていることでたいへん結構な事だとは思いますが、2番目の表現ぶり、つまり、資源循環の確保と言ったときに、どこまでやればいいのかという問題もありますし、資源循環という言葉自身が、やはりもう少し何をやろうとしているのか、もう少し具体化するような言葉があった方がいいのかなと感じました。循環そのものが目的のような気もしますが、やはり手段でもあるので、とはいえあまり手段とは言わずに循環そのものを謳い、しっかりやりましょうと言って多少自己目的化するぐらいでもこの場合は分かりやすくいいのかもしれないという気もしますので、協働の2文字という所ほどシンプルにはできないかもしれませんが、2番目を、循環そのものだとまさに全体の目標のような気もするので、この部分をどのように考えていけばいいのかということが気になっています。

崎田座長：今の2番目の資源循環のところですが、私はこれを読んだときに、日本においては、容器包装リサイクル法では制度としてはつながって見えづらい所もありますが、食品リサイクル法ではリサイクルループ、循環の輪をつなぐということを結構推進しようとしている印象があります。EUの国などでそのようなお話をすると、皆さんが新鮮な印象を持ってくださると伺っているので、個人的にはそのような気持ちでいました。

森口委員：最近EUのキャッチフレーズではClosing Loopという言葉がよく使われて、それに相当するような言葉なのかもしれませんが、循環と言う意味にはそういう意味もあるのだと思います。ご趣旨は仰る通りだと思います。

崎田座長：全体の方向性としてはここまで話し合っただけだったので、共有していただけたらと思いますが、細かい文章に関してはもう少し事務局と話を続けた方がいいのかなと思います。あと、Zero Wasting Resource Useという言葉についても、少し資源の印象が強くなったかなという感じもしますが、なかなか難しいですかね。Zero WasteではなくZero Wastingという、新しい言葉を使ってみないかという議論が今までのWGの中で出てきた中で、今回Zero Wasting Resource Useという言葉が初めて出てきて、何か感慨深いものがあります。Zero Wasteというと、本当は資源を効率よく使うという研究概念ではあるのですが、日本の方にとっては、ごみ問題の所だけにばかり特化しているような印象があるのかなと思いますので、Resource Useまでつけたところで、今回の東京2020の思いが強調されるのではないかという印象も持って受け止めていますので、このまま進めさせていただければ有り難いと思います。また何かありましたらご意見をぜひお話しいただければ有り難いと思います。委員の皆さんよろしいですか。

それでは次のp4「資源活用の対策の優先順位と取り組みの整理」という所に行きたいと思います。事務局の皆さんよろしくお願ひします。

事務局：資料 3 p4~p7 を用いて、資源活用の優先順位と取り組みの整理について説明。

崎田座長：前回、初めてこの図を出していただいて、皆さんで宿題ということで検討していただきました。これに関して意見交換をさせていただきたいと思います。前回と一番違うのは、p6 の再生に関する所ですね。

事務局：そうでございます。

崎田座長：減らす、繰り返し使う、再生されたものを使う、再生可能なものを使うという順番になっていますね。

古澤委員：前回、森口先生からいただいたメモの中で、循環型社会形成推進基本法でも、原則として掲げつつも、環境影響によってはこの順位をひっくり返すことが妥当であればそうすべきであることが法律で書いてありますし、法律では経済的な面や技術的な実行可能性についても考慮するように書いてあります。当たり前と言えば当たり前なのですが、環境影響とコスト、大会の場合を考えたら調達の実行可能性みたいなもの、例えば、リサイクルしようと思ってもリサイクル業者さんがどこにもいなかったら何もできないわけですし、そういった環境影響・コスト・実行可能性を考慮したうえで、ということが一言必要だと思います。

崎田座長：今のお話は、例えば、図を描いたときに、欄外に注釈や参考ということで、環境影響・コスト・実行可能性等を考慮して柔軟に検討するようにとか、何かそのような一言を入れるべきということですね。

古澤委員：そういう趣旨でございます。

崎田座長：とりあえず、環境影響・コスト・実行可能性ということで。

森口委員：今の点についてですが、古澤委員のおっしゃる通りで、我々もそのように節度を持って考えているのですが、書き方はすごく難しく、それを書くと、じゃあコストが高かったらやらなくていいんだということで、そのように受け取られることも気を付けなければいけません。昔の公害対策基本法における経済との調和条項みたいな所かもしれませんが、循環型社会形成推進基本法にそのようには書いてあるんですが、この順位によるものがやはり本来は望ましいということを最大限に尊重しつつも、そのようなことも考えてくださいと言うことで、無理やり環境負荷を高くしてまで順位にこだわる必要はないと

いう書き方をしているのであって、決して無理しなくていいとまで言って弱めている条項でもないと思います。その辺書き方は非常に難しいとは思いますが、その辺は古澤委員も十二分に分かって仰っているとは思いますが、我々からこのような事を言うとあまり無理をしなくていいのだと伝わりかねないので、そこの所だけあえて申し上げました。

崎田座長：ありがとうございます。大事なお話です。確か数か月前の調達WGでもその一言を入れるかどうかで皆さん苦勞されたような覚えもありますので、あまりそれを考えて柔軟に検討するみたいにはっきりと入れてしまわずに、そういったものもしっかり考えながら、適切な対応を取るよとということですね。

森口委員：この順位を最大限に尊重したうえで、杓子定規に当てはめて、かえって悪さをすることのないよとという趣旨を書きいただければと思います。

崎田委員：分かりました。

森口委員：もう1点よろしいでしょうか。再生可能なものを使うという表現についてなのですが、この表現ではまた誤解される可能性があるかなと思っております。いわゆるリサイクルされたものを使うというのが再生されたものを使うという意味かと思いますが、再生可能なものと言うと、リサイクルしやすいもの、次回使いやすいものみたいなようにも見えるんですね。それも大事な事なのですが、再生可能資源というのは再生可能なものという言葉とは少し意味が違うような気がします。いわゆる再生可能材料、動植物由来の原料から作られたものという意味かと思っております。

そのうえで、資料2のp2で、資源管理の優先順位の項目の下から2つ目で、再生可能資源は概念の違うものが同じ三角形の図に入っているので整理が難しいというご意見があったということなのですが、私も、再生されたものと再生可能資源、リサイクルされたものと再生可能なもの上下関係をつけることには慎重に考えるべきだと思います。前は確かこの辺が並列になっていたかと思いますが、非常に端的な例はプラスチックでありまして、日本は必ずしも普及していない所がありますが、バイオマス原料のバイオプラスチックとリサイクル材で作ったプラスチックはどちらが良いかと言う話になった時に、技術的な限界で、飲食物容器などにリサイクルされた容器を使うのは大変難しいかとは思いますが、バイオプラスチックであれば技術的に可能性もあるということで、容器包装の世界でも、リサイクル一辺倒ではなくて、再生可能資源の利用にも少しかじを切られる事業者さんもおられると思いますので、ここで上下関係をつけてしまうことが何か他に波及して影響しないか気になっております。本来は、再生可能資源と非再生可能資源はこの順位にあるのではなくて、多分奥行方向にあつて、再生可能資源であっても減らした方がいいし繰り返し使った方がいいので、この次元の中で順位をつけることについては気を付けた

方がいいのかなと感じています。

崎田座長：前回は色々とその辺を議論したのですが、前回は繰り返し使うという所にリース・レンタル・リユース・再生品が書いてあり、その次に再生可能なものを使うというように書いていましたので、再生品を中に入れて、「再生されたものを使う」と「再生可能なものを使う」というように入れたのですが、逆にそれで順位が明確になってしまうというのも、それが適切かどうかというご意見ということですね。

古澤委員：専門的な話になって恐縮な所がありますが、森口委員がおっしゃる通り、まさにこれは違う次元ではないかと言うお話もよく分かります。ただ、プラスチックのお話がありましたが、再生可能資源については、大会で使うものを考えると紙や木材が多いのかなと思っておりまして、紙の場合は古紙の配合率が高いものを使い、それ以外の天然パルプについては持続可能性の確認できるものを使うという順番になるのかなと思います。まず再生資源を使って、そうじゃない場合は天然資源を使う、しかし天然資源の中でも再生可能資源を選んでいくという整理も場合によっては必要かと思えます。特に、資源のインプット側とアウトプット側を見ると、木材の自給率は、上昇してきてはいますがまだ3割という所で、国内の森林の場合と海外から輸入している場合で全く森林の状況が異なっているということもありますが、紙については海外に頼っている部分もかなりあって、再生可能資源とはいえ、再生可能資源の供給量を増やすと、天然林が減って人工林が増えるというようになっているのが現状かと思えますし、アウトプット側とも裏返しだと思えますが、再生可能資源を使うということは、再生利用との裏返しで、バージンの再生可能資源が入ってくる分は、最後は熱回収に回る分に相当するのかなという思いもあって、そういう意味では再生資源をできるだけ使うことも大事かなと思います。

ただ、ここは仰るように次元の違う話が2つ入っているというのもその通りだと思いますので、ここは分かりやすく、実際に組織委員会の各現場で、物を買ったりリサイクルに出したりするときに分かりやすい表現であることが大事ですので、それ以上はこだわつてもいいのですが、趣旨としては、上流下流を見極めながら考えていくことが大事かと思えます。

崎田座長：ありがとうございます。今のお話では、例えば木材やそこから調達する紙について例を取って話していただきましたが、そうすると非常に分かりやすいという側面もあります。ただし、きっと現場ごとの判断であると思えますので、だからこそ全部を柔軟にというわけではないですが、先ほどの環境影響・コスト・実行可能性もしっかりと考えながら、最善を考えていくという視点は大事なことかなと思います。とりあえずそういったことを共有して、このまま進めてよろしいでしょうか。この点について色々ありましたら、このポイントのところは次回に継続ということで、後半の意見交換の時間を多く取れ



ればと思います。事務局もここが少しまだ残っていることを記録しておいていただければ有り難いと思います。

それでは、次の「目標群の設定のあり方」というところをご説明いただければと思います。

事務局：資料 3p8～最後までを用いて、目標群の設定のあり方を議論。

崎田座長：今のご説明のように、指標の細かい所はこの次の資料で出ていますので、この目標の設定、いわゆる大きなビジョンとして、Zero Wasting Resource Use という案が今出ています。こういう方向性を持ちながら目標を 10 個挙げたらどうかと言うことが今までの話し合いで出てきました。そこで、目標設定のあり方ということで p8 から最後まで出ています。この 10 の目標という設定の仕方でもいいかどうか、皆さんからご意見をいただけたらと思います。

あと、私の方から事務局に質問させていただきたいのですが、別添 1 で出していただいた資料に、調達を予定している主要な物品の例が入っています。これを見ていくと、オペレーションの所に運営物品が色々入っていて、仮施設が一番上に入っていますね。下がオペレーションということで。色々項目を見ていると、紙とかパンフレットといった項目は入ってこないんですか。結構たくさん使ったりしますよね。こちらの一覧表のところにはパンフレット類やグッズといった色々な物が資源・廃棄物の所に入っているのですが、別添 1 の資料にはそういうものが入っていないですね。

事務局：紙を使用しないということはないのですが、V1 予算で大きなところを捉えたときには、そこまで挙がってこなかったということでございます。

崎田座長：オペレーションなどの項目の中に入ってくるであろうということですね。

杉山委員：今のオペレーションの項目の中に、飲食という項目があり、選手・ボランティア向けということは書いてあるのですが、観客等が入っているのでしょうか。相当の方が観客として来られるわけですので、その影響も大きいように思うのですが、その所はいかがでしょうか。

事務局：ロンドンの例ですと、観客の数も含めると桁が 1 つ増えるぐらいでございましたので、今のところは選手・ボランティア向けということで、観客を入れていない数字でございます。

杉山委員：そうなりますと、例ということなので入れていないのかもしれませんが、主要

な物品の中には観客に関わるものも入ってくるべきではないかと思えます。

勝野オブザーバー：これは、経費に基づく資料ということなので、観客向けは有料で提供するので、組織委員会の経費に計上していないのではないのかと想像するのですが、違うでしょうか。選手・スタッフ向けは無償提供なので、組織委員会として予算を計上する必要があるという意味かと思うのですが。

事務局：それもあつたのですが、例えば容器などは調達物品ですので、飲食提供の経費に含まれていると思えます。

勝野オブザーバー：観客向けの容器も、コストに入っているのでしょうか。観客が支払う料金の中に入っているということですか。

事務局：観客が支払うコストとして見るか見ないか、その判断による所になると思えます。

勝野オブザーバー：これは単に経費に基づく資料なので、参考に過ぎないと思えます。資源管理の対象にはそういったものは当然入ってきますが、この資料は経費に基づく資料ということで、組織委員会が調達するものとして物品の例が示されているものであると理解すればいいと解釈したのですが、いかがでしょうか。

崎田座長：勝野オブザーバーのご発言の趣旨からいけば、全体の物品の流れを見ることはできますが、どれだけの資源と廃棄物かということについては、マネジメント表を見ていただければ、競技会場と選手村と両方が入っているので、こちらの方が現状が分かるということでもいいんですかね。事務局さんもそのような理解で進めてよろしいでしょうか。飲食も、観客を入れればケタが違ってくるはずというお話で、私も、ロンドンでは1500万食ですとか1550万食であったといったお話をよく聞いております。

勝野オブザーバー：ロンドンでは、“London2012 Food vision”で出した数字はその数字でしたが、実際は2000万食ということで、組織委員会が聞き取られた数字としてはそのようになっていたと聞いています。

崎田座長：それは観客向けの提供は入っていないんですか。

勝野オブザーバー：入っています。

崎田座長：観客向けも含めての数字ということで、1550万食ではなくて2000万食だったということですね。杉山委員大事なお指摘ありがとうございます。そのような理解の下でこの資料をもう一度見ていただければと思います。

1つ質問なのですが、p9では目標設定の全体の関連図が出ていますが、購入物品の所にカッコ書きで（梱包材含む）と書いてあるのですが、梱包材についてはかなりしっかりと計画を立てたりしないと、梱包材はかなり多く、大変になってくると思いますので、できるだけ梱包材を減らして、なおかつきちんと運んでいただく、あるいはきちんとした梱包材を持ってきていただいて、それはリユースするような梱包材で戻してまた使っていただくとかですね、梱包材に関してもきちんと考えておかないと大変なことになるかなと思います。現場ではそのようなことはきっと考えられているとは思いますが、ロンドンにおいて廃棄物計画立案に参加した方に伺ったときに、梱包材は非常にウェイトが大きかった、この配慮が大事だというお話をされていたことが非常に印象に残っています。

勝野オブザーバー：先ほどの数字を訂正します。ロンドン大会における飲食の提供数は、大会全体で約1500万食以上、選手村で200万食ということでした。

崎田座長：分かりました。私が調べたときには1550万食と言う数字が出たのですが、それを合計したようなものかもしれませんね。

勝野オブザーバー：今のは、組織委員会が公式に出している情報です。

崎田座長：どうもありがとうございます。

古澤委員：今見せていただいている資料のp8からp9の所で、p9はたいへんよく整理されていると感じました。先行してしまって申し訳ないのですが、資料5「ISO20121規格に準拠したマネジメントシステムの導入について」の所のp8を見ていただければと思うのですが、今我々は8ページのこの表を上から順番に見ているのかなと思っていて、先ほどのZero Wastingをはじめとした議論は表の「5.2 方針」に関わる所で、今、その下の「6.1.2 課題の特定及び評価」及び「6.2 目的及び方法」といった所に話が移りつつあるのかなと思います。机上資料を用いて、課題全体の中でどこが重要な所かを押さえたうえで、それを目標設定として「6.2 目的及び方法」の所で整理しているということで、全体の流れがすごくわかりやすく、この資料はよくできていると思った所です。

元に戻っていただいて、資料3のp9の所で、赤字で書き加えられている所を見ると、全体のバランスもいいな、こんなものかなという感じが大きいにします。細かい所でいくつか申し上げますと、上の方で赤字で書いてある「調達物品の再使用・再生利用」の所で、ここから点線が右側に伸びているのですが、p10の資料からすると、調達物品の再使用・

再生利用はインプット段階からも考えるべきということなので、再使用・再生利用を行っていくうえでは、インプット側で、調達段階でどのようなものを調達するといったことも見て考えながら行っていることを示す必要があるかと思います。また、左下の、先ほども議論になった「再生可能資源の利用」については、再生可能資源の利用に関しては調達コードの中でも再生可能資源に関しては特段の基準が、木材から始まって、食材の関係、パーム油や紙といった所で示されるわけで、非常に組織委員会は注意をされていると思うのですが、この再生資源の利用に関しては、特に合法性や持続可能性について特段の注意が必要だという所は、全体を見るとときに重要なポイントかなと思います。

また、建設資材系に関して真ん中から下辺りにありますが、1つは新規施設の関係で、新規施設はそのまま建てて終わりみたいな感じに見えてしまい、東京都としては若干気になるのですが、東京都としても新規施設に関しては、例えば資源の面で言えば、しっかり長期的に使ってもらえるもの、大事に使っていける施設を作るということを念頭に取組んでいますので、直接目標には関わってはいませんが、その点をコメントさせていただければと思います。それから、その下の建設廃棄物・建設発生土から伸びている所に、再資源化・有効利用等とあるのですが、組織委員会でビレッジプラザの木材のお話があり、この話は木材をそのまま利用する形なので再資源化という表現でいいのか若干迷うのですが、すごくアピールのできる取り組みですので、もう少し言葉を広げていただければと思います。

崎田座長：最後にお話された、もう少し言葉を広げた方がいいというのは、どのような意味でしょうか。

古澤委員：再資源化ではなくて、これはビレッジプラザの木材を使っていこうという話でするので、かなり再使用に近い話ではないかと思います。

崎田座長：では、そこを再使用・再資源化というように書いてもいいのではないかというお話ですかね。そういう意見もありますので少し検討していただければと思います。あと、その前の「再生可能資源の利用」に関しては、おっしゃったように、森林資源のような建設資源については、社会の関心も非常に高くなっていますので、表としてはこれでいいのですが、色々書ける所があれば記録を残していただければ有り難いと思います。でも調達の中に入っているということですね。

あと、一番最初におっしゃった、赤字の一番上の方にある「調達物品の再使用・再生利用」の話ですが、これは、入口の所にも関係があるというお話はその通りですので、例えば点線を、今右下の方だけにありますので、左下の方にも引くとか、そういった形も検討していただければと思います。

森口委員：古澤委員がおっしゃった通り、この p9 の図はたいへん分かりやすくてよくまとまっているなという印象でございます。上の方が比較的寿命の短いもので、下の方ほど寿命の長いものであるという整理になっているかと思えます。あと、ボックスの大きさで量感を表しているものではないということは理解しているのですが、ゆくゆくはボリューム感も含めたマテリアルフロー図みたいなものが出てくると、全体が分かりやすくなるかと思えます。今日の段階では結構ですが、いずれはそのようなものがあればいいかと思えます。

改めてこのように整理していただくと、多少まだ詰めなければいけないと思うのは、図の真ん中辺りのところですね。施設の話はこれまで結構やってきて、食品や容器などのライフサイクルの短いものはずっと議論してきたかと思うのですが、座長の仰った調達物品の再使用・再生利用であるとか、レンタル利用による調達物品の新規製造の削減とか、この辺りが具体的に実際どの程度できるのかということが、かなり難しい、難易度の高い所かなと思えます。かといって、ここで議論しつくせることでもありませんし、組織委員会が直接手が出る部分でもないのかと思ったのは、A3 の表を拝見してちょっと気になったのは、いわゆる電気電子製品の類のものほどどのようなのかと思っております。例えば大型ビジョンであれば、これはスポンサーさんから提供されるということで、その辺りはスポンサーさんなのでなかなか強いことを言いにくい部分もあるかもしれませんが、逆にスポンサーさんにとっても非常にいい取り組みをやっているのをアピールするいい機会になると思えますので、この辺りで、スポンサーさんからのレンタル提供などを受けるものについて、現実には新規製造の削減といっても、オリンピックのためであるからして、最先端の新しい技術を作ってこられるのではないかと思いますし、それを止めることはなかなか難しいとは思いますが、それでは大会の後に果たしてどう使っていくのかといったことについても、もし可能ならばそこに踏み込んで、協働というキーワードも出ていましたので、そういった所をアピールしていただくことを含めて、先進的な取り組みをしていただければと思います。

A3 の資料の中で、具体的にリユースやレンタルに関して踏み込んで書かれている部分もあるのですが、一部レンタルしますということだけが書かれていて、それによってどの程度新しいものを作らないということが担保できるのかと言うことが具体的に見えにくい部分もあると思えますので、希望としては、p9 の図で言うと真ん中辺りの所で、もう 1 つ目玉になるものを見つけていくとか、色々ご協力いただける事業者さんの自発的な取り組みを促していただくようなことをお願いできればと思います。p10 の 10 個の指標で言えば、特に 3 番目の目標の所に関わってくるのかなと思えます。ここの所の具体的なイメージ作りを、この後進めていただければと思います。

崎田座長：大事なお指摘をありがとうございます。最後におっしゃった、真ん中辺りの購入物品やレンタル品の話に関しては、確かに「調達品の再使用・再生利用」の所から後で

点線を引いていただいたとしても、どのようにして実効性を上げるのかという具体的な所が見えてこない、想いだけはいいけれども実際にどうするかという話になりますので、その点については今色々ご検討いただいていると思いますので、その辺りについて形が見えてきたらぜひ情報提供いただければと思います。

私自身は、リース・レンタル品等は、新規製造の削減にもなりますし、新しく作っていただいたものを長く使うという利点もあるわけですので、その辺は柔軟に考えていくことも大事ですし、あと、購入物品に関しては、買戻しというようにありますが、買戻しだけではなくて、例えば買戻しできないものに関してリユースの市場を作って販売するとか、そういった方法もあるかと思っています。柔軟に、いろいろな方法を考えていきたいと思えます。森口委員のお話に関して何か事務局の方からコメント等がありますか。実際に色々動いている最中ということで、この図の整理に関しては委員の皆さんから非常に分かりやすいというお話もあって、事務局の皆さんもここまで進めていただいております。あと、先ほど森口委員から、出る廃棄物と図のボリューム感が合うといいというお話がございましたが、それは希望的宿題として残していただければと思います。

それでは、次の議論に行きたいと思っておりますので、またご意見等があれば後半で言っていただければと思います。次の資料4「個別項目の目標指標の考え方について」の所をご説明いただければと思います。

事務局：資料4を用いて、個別項目の目標指標の考え方について説明。

崎田座長：ありがとうございます。今、ご説明いただきましたように、この10項目に関して今回と次回でご意見をいただきたいと思っておりますが、今回は項目3・7・8についてご意見をいただきたいということで資料を用意していただきました。まずは、項目3「調達物品の再使用・再生利用」の所からご意見をいただければ有り難いと思っております。資料4で言うとp3とp4の所です。これは調達物品と運営時廃棄物と両方が色々な所で関係しているかもしれないので、食品廃棄物は後にしますが、項目3「調達物品の再使用・再生利用」と、項目7「運営時廃棄物の再使用・再生利用」の所でご意見があればお話いただければと思います。

古澤委員：項目3「調達物品の再使用・再生利用」の目標設定は、まさに、どういうアクションをするかが大事ですので、数字がどのレベルかということについては、調達する品目のリストをしっかりと把握できてからでないと、なかなか難しい所があると思っております。ただ、先ほど議論にあった優先順位に関しては、しっかり各FAに徹底させていくこと、リース・レンタル優先であるということも含めて徹底をさせることがここでは非常に大事かと思っております。

また、若干先ほどの表からは細かい所になるのですが、消耗品に関しても余るものがある

るはずなので、ロンドンではそのようなものも当然リユースに回していましたが、余った消耗品の買戻しも含めてリユースを図っていくとか、元々中古市場でも後で売れるような品物を買うといったことが必要だと思います。これは全くの例ですが、オリパラ関連の特殊物品については、例えば平昌大会で使ったものをもらってきたり、東京大会で使い終わったら北京大会で使ってもらおうといったことを考えてもいいのではと思いますので、もしアイデアがあればよいと思います。

あと、実際に使っていく際には、丁寧に使用して、丁寧に撤去して、それから、どうしても後利用をする際には一定の保管が必要になる可能性もあります。物品が直ちにさばけない場合もありますし、中古市場の規模もありますので、直ちにさばけない場合の保管についても考えるべきかなと思います。あと、「調達物品の再使用・再生利用」とトータルでひとくくりになっていますが、特に再使用に関しては、修理や加工をした後に再使用をする場合は、費用も掛かりますし、そもそも早い時期から計画を立てて関係する事業者さんを見つけておかないと、大会で使用し終わった後に加工する事業者を募ることは難しいので、早期にプロジェクトを募集するなりして取り組んで行くべきかなと思います。

崎田座長：今のお話ですが、ロンドンの時のデータを見ても、リサイクルが62%というデータがありますが、その内訳を私が調べたところ、リユースが17%、リサイクルが29%、堆肥化が17%という数字が入っていました。

古澤委員：ここで言っているリユースは、先ほど少し申し上げたような、消耗品の余剰品をリユースした部分しか入っていないのです。例えば、余った軽油をリユースしたといった事例が含まれます。ここで言っている調達物品等のリユースとは、ロンドンの方では建設廃棄物等も含めて、そちらのくくりで整理されているんですね。

崎田座長：分かりました。ということは、その方が量的に把握しやすいという話ではないのですね。東京は東京のやり方でやっていけば良いわけですので、ありがとうございます。今の古澤委員のお話のように、ここはターゲットをどのようにしていくかというのは、もちろん意見交換も大事で、今ここに計算方法も出ておりますが、これを実現させるやり方を、しっかりと準備できるかどうか非常に大事だということで、そういったことと連携させて話をしていかなければ、数字というものは作っていけないのではないかとこのお話はごもっともだと思います。

先ほど、リース・レンタル・リユース等については後で市場を作ってもいいのではないかとこの話がありましたが、私も先日、ホテルなどが廃業する時に、丸ごとそこにあるものをリユースすることを請け負う業者さんの倉庫に伺って色々拝見したり、全ての流れをビデオで拝見したことがあります。先ほどご発言があったように、もう一度使うことを前提に、非常に丁寧に扱って、しっかりと運んで、ある段階からは大きなものについては次

はどこが使う、どこが買い取ると言ったことが分かったうえで動かすと言ったことを非常に戦略的に行っておられたので、だからこそ 100%リユースとすることができるのだという感じがいたしました。やはり、どのような戦略で行くかが大変重要になってくると思っています。

森口委員：まず項目3「調達物品の再使用・再生利用」について3点ほど申し上げます。1点目は今の古澤委員からのご意見と座長のご発言にも関わりますが、今日の資料の中にも「後利用先を確保し」ということが書かれているのですが、再使用された調達物品の重量と書かれている部分が、何をもって再使用されたと認めるかというあたりが大変重要ですね。ライフサイクルアセスメントでよく議論になるのは、リサイクルとは、リサイクルできるものを出した側がある種の手柄なのか、それともリサイクルされたものを使って初めて手柄にカウントするのかという議論があるんですね。あるいは両方だという議論もあるのですが。やはり、今のままだと、レンタルしてきて次はだれかが使ってくれるはずだからということだけで分子にカウントすると、ちょっと甘い部分があるかなと思います。その意味では、次が使われることを確実に担保されるという意味も含めて、分子の方は厳しく見ていくという考え方が必要かなと思います。

2点目は再使用なのですが、日本の場合は、リユースとはそのまま使うというイメージが非常に強いのですが、最近ではRの考え方も多様化してきており、リマニュファクチャリングと呼ばれる、一手間かけて別の新製品に生まれ変わらせたうえで使うという概念も非常に重要で、今年から大きな研究プロジェクトも動いたりしていますので、その辺も視野に入れてもいいのではないかなと思います。先ほど大型ビジョンの辺りが気になりました、それをそのまま使うというわけにはいかないとは思いますが、大部分は作り直して次の大会で使うといった、そういった概念も含めてよいと思いますので、何が何でもそのままその形で使わないといけない、それがリユースだ、というようにならないような工夫が必要かなと思います。

3点目としては、ハードルの高いことばかり申し上げて大変申し訳ないのですが、指標に関して、調達時のいわゆる実重量ベースで測れば、あまり価値はなくても重いものもしっかりやれば指標の数値が良くなるってしまうわけで、中には、それ自身の重量は小さくても、その裏にかなりの資源の消費を背負っている物品というものもあるんですね。この考え方は、マテリアルフットプリントとか、エコロジカルリュックサックという言葉で従来から提唱されていまして、ちょうど、p3に関連するSDGsということで「12-2.2030年までに天然資源の持続的な管理及び効率的な利用を達成する」が掲げられていますが、この指標にも、直接資源消費量ベースのものとマテリアルフットプリント両方で見てくださいということがすでに出ていますので、これもハードルは大変高いのですが、考え方としては、実重量だけでなく、裏で背負っている資源量も加味した指標も試行的にできるのであれば考慮してもいいのかなと思います。以上が、項目3に関わる3点です。



項目7「運営時廃棄物の再使用・再生利用」については、先ほどの話も若干関係するのですが、また、食品廃棄物も関係してくるかと思いますが、p6の具体的な指標で言いますと、再使用・再生利用された運営時廃棄物の重量が分子にあります。出口側のリサイクル率についてはあらゆる場面でやっているのですが、どの断面をもって再生利用されたと捉えるかは大変難しいんですね。伝統的に廃棄物の処理の場合には、焼却処理や埋立とかに向かわずに、再生利用に回った量をもってそこで取るということが一般的にあるのですが、現実には、リサイクルに回ってもその中にリサイクルできないものがたくさん混ざっていたりして残渣がたくさん出てしまい、実際に再生利用に回った量はその半分ぐらいだったと言うこともありうるわけです。

本来の end of life の recycling rate というのは、回収率と言いますか、再生利用に向かった量だけではなくて、リサイクル段階での効率もかけたうえで、真に再生利用されたものを分子に取るべきではないかという議論もあります。これも非常にハードルの高い所はあるのですが、二段階に考慮したうえで、リサイクルに回っただけでなく、回った後もしっかりとリサイクルとして取り出されたかどうかをトレースしたような二段構えの指標にさせていただくと、より行動感が出るのではないかと思います。

崎田座長：大事な事を色々とお話いただきました。最初にお話された、項目3の所の資料でp4ですね、分母と分子なのですが、分子の再使用の所で、どの段階で再使用されたものをきちんとどうやって担保するのもあるのですが、確か今までの議論の中で、購入する時に、それをどうするかということまで、きちんと調達仕様書にどこまでそのような文言を入れるかという意見交換をしましたが、今、調達の段階で、使い終わった後の処理方法についてどこまで文言を入れることができるのか、あるいはどこまで配慮されているか教えていただけますか。あまりそこが入っていないのならば、今からでもそのようなことがきちんとお話ができるのか。調達する時に、使い終わった後どうするかを考えてあるかどうかを調達の項目に入れておくことで、それが1項目あればここが担保できるわけですよ。少しハードルが高いですかね。

杉山委員：おっしゃるように、そうしておく大きな歯止めになりますよね。

事務局：現状では様々な調達方法があろうかと思います。確かにご指摘いただいたようなやり方も望ましいのかもしれませんが、大会では非常に多くのものを買うことになりま。最初の購入時点で仕様を条件とした場合に、求められる調達を全て行えるのかということになりますと、非常に疑問だと思います。もちろん努力するのですが、調達の時点での条件にすると非常にハードルが高くなってしまいう可能性があるんで、慎重に考える必要があるかと思います。再使用についても、調達したものの特権契約みたいな形もあろうかと思ひますし、様々な方法があるかと思ひます。なるべく後利用できるような方法も検討

しながらと思いますが、ものによってはそんなに簡単に相手先が決まらないものもありますし、電気製品のように、使用した後に検査・確認をしてからでないといけないものもあります。残存価値がどのくらいになるか不明なものも多々ございますので、様々な要件を見ながら判断していくことになると思います。

崎田座長：この1項目を加えるとハードルが高くなってしまったりといったこともあるかもしれませんが、色々お話されたようなこともあるかもしれません。

勝野オブザーバー：今の議論に関連してですが、おそらく、全体的にかけていくのは難しいとは思いますが、まさにこの議論で物品ごとにどういう戦略で調達するかという視点を持って議論していると思うので、ある程度、こういうものはこういう戦略でというものが決まれば、仕様書にこう書きましょうとグルーピングできると思うんですね。そういう整理で、ものによってケースバイケースで変わってくることは当然なので、ある程度調達するものに対してグルーピングして、こういうものに対しては仕様書にこう書きましょうとか、最初からレンタルすることが想定されて調達するものと、消耗品的に調達するものとか、色々とかテゴリーが分けられると思うので、こういう場合にはこうするという整理をしておけば、かなり戦略的な調達ができるのではないかと思います。

あと、もう1点、東京都さんがもし情報をお持ちでしたら教えていただきたいのですが、選手村の什器やお風呂といった、海外の選手向けに巨大な、日本ではあまり使わないものを調達するので、それをどう再使用するか、東京都さんがホームページ上でアイデア募集されていたかと思うのですが、もし可能なら、どういうアイデアが出てきていて検討状況はどうなっているのかといったことを教えていただければと思うのですが。

白井委員：3Rのアイデアについて募集をしておりましたが、結果についてはまだ取りまとめているところと聞いておまして、今、新しく委託についても検討しており、実際に発注している所ですので、その辺りがまた進んでいくと思います。

勝野オブザーバー：実際にそのようなことを東京都さんもされているということですね。

崎田座長：大変いい流れができていくということで、ありがとうございます。今、勝野さんからご発言があったように、ものによって配慮できるものとケースバイケースと言うような柔軟な発想をしつつ、1つ工夫すればできるというようなことにチャレンジしていただいて、今東京都さんがやっているようなことを広げていただければ有り難いと思います。

あと、森口委員が2番目におっしゃった、重量で分母・分子が来ると、重いものをしっかりやれば数字が良くなるという傾向があることについて配慮すべきであるとお話があり

ました。例えば、配慮しておいた方がいいもので、今一番気になっているものがあれば、具体的にいくつか挙げていただくと有り難いと思います。

森口委員：やはり電気電子製品やケーブル類ですかね、金属をたくさん使っているものは1つの核になるかと思います。あと、先ほどうまく表現しきれなかったかもしれませんが、項目3の分子が「再使用・再生利用された調達物品」となっていますが、日本語とは難しいもので、どちらにでも読めるんですね。つまり、既に誰かが使ったものを今回このオリンピックで再使用・再生利用されるという意味にも取れますし、今回使ったその後誰かが使ってくれるという意味にも取れます。一番ベストなのは1回誰かが使ったものを使い、次の利用も確保されている状態、再使用・再生利用を2回見ているという状態なのですが、入口と出口側で両方測るべきだということで、他の所でも出てきたかと思いますが、そのところが同床異夢だといけませんので、今日の議論で大事なものは、オリンピックで使った後、誰かが再利用してくれることまで担保しなければいけないという議論なのですが、もちろんそうではなくても、オリンピックで誰かが一度使ったものを使うのならば、それは明らかに再使用であるということも非常に重要なことなので、両側見ているのであることをこの場で確認しておいていただければと思います。

崎田座長：そうしますと、「再使用・再生利用された」という表現のままでもいいんですかね。「される」なのか「された」なのか。どちらがいいですかね。

森口委員：「再使用・再生利用した」と「される」ですよ。「された」だと両方に見られるかもしれません。

崎田座長：「した」ものを使う場合もここに入れるのかとか、ちょっと計算方法が悩ましい所がありますので、検討課題として残させてください。3番目におっしゃった、項目7「運営時廃棄物の再使用・再生利用」で、どの断面で再使用されたかと考えるか、トレーサビリティをしっかりと行い、どのようなものを持って行って再生資源になった、その次にどのようなものになったかということまで行くといいですね。この議論は、色々な法律制度の中でなかなかそこまで書き込めない所で、非常に大きな課題になっている所ですので、私たちから見れば、オリンピックのような見えるイベントにおいて一歩取り組めればうれしいと思います。そのぐらい責任を持っていかないと、あの時使われたものが工場に運ばれて資源にはなったけれども、そのまま使われず野積みになっているということになったらすごく寂しい話ですよ。

勝野オブザーバー：このような取り組みこそ公募でアイデアを募集して、付加価値のある商品に加工して販売していくといった取り組みができないでしょうか。アンブッシュの間

題もあるかとは思いますが、オリンピック・パラリンピックで使った物品から、例えばコンポストから作った花ですとか、そういった付加価値をつけられると有効利用ができると思います。そのアイデアをどんどん使っていければと思います。

崎田座長：紙なども有効利用できますし、コンポストもできますし、その期間中の2か月で再資源化は無理だとしても、社会全体としてはきちんと共有できますね。もちろん大会期間中に回ればいいですが。

古澤委員：項目7「運営時廃棄物の再使用・再生利用」の関係で、別添資料3という形で資料を用意させていただきました。組織委員会で用意された資料でも、ロンドン大会での目標や実績を示していただいています。ロンドン大会では東京と事情がだいぶ違うと考えておりますので、資料を用いて説明させていただきます。

別添資料3に基づき、ロンドンと東京における、ごみ分別とリサイクルの方法の違いについて説明。

崎田座長：ありがとうございます。今、東京都の方から、ロンドンの状況と東京だとどうなるかという違いについてお話いただきました。分別はどのくらいまできちんとできるか、日本だけでなく、世界からやって来てくださる方にどのように分別してもらうかも大変問題な所で、細かな分別も、細かすぎると難しいという辺りもしっかりと話して行かないといけないと思いますが、どのような品目をどのくらいの分別にするということはどの段階で話をしていくことが必要ですか。

例えば、WGの場で話すのか、もっと作業部会のような、現場のことがよく分かる方たちで話すのか。このWGも皆さん専門家が揃っていますので、ここである程度のことを提案した方がいいでしょう。どのように分別の所を進めていったらよろしいですか。事務局さんはどうお考えですか。

事務局：即答はなかなか難しいとは思いますが、こういった場でご議論いただくことはもちろん可能ですし、オペレーションの話もごございますが、時期的には、そろそろ大会全体での廃棄物の分別の仕方についても、各会場でどのような資源分別をするか決めることによって、会場でも分別箱を置く面積を確保しないといけないといった問題もありますので、既に大会の細かいオペレーションがだいぶ詰まっていますので、どのスペースをどれだけ作らなければいけないかといったことを決めないといけないので、時期的にはしっかりと議論して決めていく状況にあるかと思っています。

崎田座長：次回にしっかりとこの辺を細かく行うか、それとも次回までに1回委員の皆様で

緊急勉強会等を行って意見をいただくか、何らかの形でやっていきたいと思います。

それから、その時に環境省からも情報提供をいただければ有り難いと思うのですが、環境省の方では、以前、分別のピクトグラムや分別の仕方についての委員会を開催していただいて、こちらでご報告いただきましたが、もう1つ、高校生や大学生ぐらいを想定して、分別についてアドバイスできるような青少年のボランティア育成のためのプログラム作りという委員会についても開いてくださっていますので、私も関わっていますが、そういったことも一緒に情報提供していただいた方がよいのかなと思います。そういう流れも考えて、この後のWGの流れを作っていければと思います。

高林オブザーバー代理：今崎田座長が仰っていただいた通りで、今日私が代理として来させていただいた鈴木の方で、崎田座長からご紹介いただいたような取り組みを行っていますので、また鈴木とも打ち合わせを行って、次回以降情報をご提供できるようにさせていただきます。

崎田座長：ありがとうございます。よろしく願いいたします。

古澤委員：今のお話ですと、出すときからの分別が日本ではリサイクルの決め手になるということで、分別の精度を高めるには、分別ボックスの分かりやすさ、そこへの人の配置、バックヤードでの再度の選別といったことがあるかと思いますが、バックヤードはあまり期待できないですね。面積的にも厳しいですし、また、バックヤードの作業も結構大変で、相当な負担がかかってしまいますので、多くは期待できないと思います。

崎田座長：あと、留意すべき事項の中で、紙について、通常のリサイクルと、普通は禁忌品となるような紙コップや紙皿のお話もありますが、禁忌品となるようなものについては、例えばトイレトーパー等にして大会会場でもう一度使って、リサイクルの輪がながっていることを共有できるとか、色々チャレンジすることもできなくはないと思いますので、色々な可能性があることを社会に示せたらよいですね。人知れずしっかりやっている部分と、分かりやすくやっていける部分と両方あることが大事ですので、皆さんで考えていければと思います。

時間が押しておりますが、項目8「食品廃棄物の再生利用」についてもご意見をいただければと思います。食品廃棄物の再生利用については、次回にも話の積み残しが出るようなので、また話をきちんとしていこうと思いますが、今の段階で気になっておられることがあればと思います。

私は食品ロス削減の呼びかけも行っているのですが、食品ロス削減の効果をどう定量化するかといったことを、政府各省がモデル事業や調査をしたりして色々検討していただいている最中ですので、食品ロスに関して定量的な目標が出せるかどうかはちょっと難し

いですが、食品ロスについてはみんなでしっかり取り組んで、具体的な目標は食品廃棄物を減らすということで明確に数字を示すといった、いくつかのやり方もあるかなと思います。

森口委員：これは大変難しい所なのですが、リサイクル率という指標はなかなかくせもので、たくさん捨てても沢山リサイクルすればいいという話になったり、あるいは、削減努力に力を入れていくとどうしてもリサイクルしにくいものだけが残ったりということも起こりうるので、本来やるべきことは、発生抑制をしてリサイクルをしたうえで、どうしても残ってしまうリサイクルされなかった食品ロスの絶対重量を減らすことがたぶん大事で、リサイクル率を上げることは手段に過ぎないので、その辺りで指標の工夫ができないものかなと思います。分母の方が難しく、選手の人数なのか観客も含めるのか、あるいは、食数なのか、1食辺りの再生利用のされなかった廃棄物の処分量みたいなものをミニマムにしていくといった考え方もありうるのかなと感じました。

崎田座長：食品ロスを削減し、出てしまった食品廃棄物に関してはしっかりと資源として活かしていく、最終的に処分しないといけない廃棄物量をできるだけ最小化するといったことですね。

森口委員：項目1「食品ロス削減(食品廃棄物の発生抑制)」で食品ロスを削減することも目標にしていますので、項目8「食品廃棄物の再生利用」では再生利用率をとらえるという考え方でいいのかなとは思いますが、全体でバランスよく見ていった方がいいのかなとは思っています。

古澤委員：森口先生のお話に関連しますと、食品ロスの削減は当然の前提として、食品廃棄物をリサイクルするというときに、先ほど申し上げたように、食品廃棄物のリサイクル施設で受け入れてくれるように選別して持って行くことが求められるので、分別をすることがきわめて大事だと思うのです。ここでもそのことが少し考慮されているのだと思いますが、食品リサイクル施設の受け入れ条件に適合する分別ができる現場とできない現場があると思うのです。できるとしたら、選手村のダイニングとか、ある程度規模がまとまっている所かなと思っております。そういう所で、飲食提供を受託した事業者さんと、清掃業者さん、あるいはリサイクル業者さんがきちんと連携してもらって、異物が入らないようなしっかりした分け方をして持って行く必要がありますので、それをきちんとリサイクルのプロセスに入れる必要があります。逆に、そこが徹底しにくい所のものまで無理にリサイクル施設に持って行っても、異物が入るだけということになりますので、そういった食品廃棄物のリサイクルの流れを押さえながら考えていく必要があると思います。

崎田座長：今、食品リサイクル法では、外食産業でのリサイクル率の目標が2030年で50%という目標で、現状ではリサイクル率が30%程度という所で実施されていますが、社会全体で分かりやすいものが作れたら、SDGsでは2030年に現在より半減すると目標を立てていますが、流れとしては強く出して行けたらと思います。

ちょっと駆け足で行ってきましたが、後半の指標に関しては、次回に積み残しの所もありますので、残されたテーマも含めて、次回しっかり意見交換できればと思います。

杉山委員：今日は項目3・7・8についてのお話で、項目7「運営時廃棄物の再使用・再生利用」と項目8「食品廃棄物の再生利用」についてはこちらで示されている重量ベースの計算方法で納得しやすいのですが、項目3「調達物品の再使用・再生利用」の物品については、例えば仮設のプレハブであるとかフェンスであるとか、最後にトータルで見るときには重さで計算して按分するという事も必要かと思いますが、サブ指標みたいなもので、特に重要なものについてはその品目の台数や個数といったサブ指標で見ることも必要ではないかと感じました。

崎田座長：重要なものに関して分かりやすいサブ指標があってもいいのではというご意見など、ありがとうございます。この辺のご意見をもう一度整理して、また次回に意見交換したいと思います。

残されている議題がもう1点あります。ISOのマネジメントシステムについても、これまでも取り組みますといった話はありませんでしたが、今日はきちんと資料を出していただきました。意見交換は難しいかもしれませんが、とりあえずご説明いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

事務局：資料5を用いて、ISO20121規格に準拠したマネジメントシステムの導入について説明。

崎田座長：ご説明いただきまして、今日は時間が短くなってしまいましたので、委員の皆様もこれについての意見交換がありましたら次回積み残しということでやらせていただければと思いますがよろしいでしょうか。

ISOをしっかり回していくことで、私たちが今話していることを、今後、サプライチェーン管理を強化していただきながら、具体的な成果を出して行くという流れですので、大変重要な所かと思えます。なお、ロンドン大会の後にパリ協定ができたということで、CO2を明確に評価することは社会の流れで非常に関心が高まっていますので、こういう組織の認証だけではない、CO2の評価をどうしっかり行うかといったことについても、脱炭素WGの所でお考えになっているということかと思えますので、また情報をいただければ有り難いと思います。よろしく願いいたします。

今日も大事な項目が多かったので、集中してご意見をいただきまして非常に良かったです。ありがとうございました。それでは事務局にお返しいたします。

事務局：本日も貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。次回は11月29日に開催いたします。次回も、本日いただきました宿題も含めて率直に意見交換していただきたいと思いますので、またよろしく願いいたします。

崎田座長：ありがとうございました。

以上